

様式第1号

意見交換会実施報告書

令和 7年 8月22日

裾野市議会議長 様
広報広聴委員会委員長 様

報告者 井出 悟

1. 意見交換会の概要

開催日時	令和7年8月22日 19時00分 ~ 20時30分
開催場所	須山地区研修センター
代表者 (委員会名)	井出 悟
出席議員	土屋 主久、井出 悟
参加市民数 (団体名)	50人 (須山地区市民 10代から70代)
実施内容	議会報告 なし
	意見交換 須山の未来を考える意見交換

2. 市民の質問・意見等

質問と回答など	別紙
---------	----

須山の未来を考える意見交換会@須山研修センター 2025年8月20日

高校生、大学生、区民の皆様にお集まり頂き本当にありがとうございました！

3つのテーブルに分かれ行われた意見交換会の様子を議事録としてまとめました。

生成AIを活用したボイスレコーダーの音声解析のため、誤字などがある場合がありますが、意見交換会の「臨場感」をお伝えすることを優先し、発言要旨としてそのまま記載しました。

議事録(テーブル1)

発言の要旨

- 話者B (70代女性): 自身の長年の子育てや孫育ての経験から、子育て世代が本当に必要としているものについて語った。
 - 何より困るのが、雨や雪の日に子どもたちが安全に、そして思い切り遊べる屋内施設が須山にはないこと。
 - 御殿場市にある「富士桜」は理想的。あのよう、図書館や児童館、食堂などが一体になった複合施設があれば、世代を超えてみんなが集まれる。
 - 高齢者にとっても、気軽に立ち寄ってお茶を飲んだりおしゃべりしたりできる「サロン」のような場所が必要。
 - ただ、これまでもこういった意見交換会はあったが、そこで出た意見がその後どうなったのか、住民に何も知らされないままになっている。その点は大きな課題。
- 話者C (高校生男性): 若者が将来、須山に帰ってきたいと思えるような魅力づくりが必要だと訴えた。
 - 学校でのスキー教室などは充実しているが、それはあくまで「学校」の魅力。「須山地区」そのものへの愛着には直接つながっていないのが現状。
 - 地域の良さを知る機会も、カラオケなど若者が楽しめる場所も少ない。
 - 若者が「この地域に何かをしてもらった」と実感できるような経験がないと、将来戻ってくる強い動機にはならない。
- ある参加者: 夏祭りのような伝統行事を、若者が主役になれる場にすべきではないか。
 - 例えば、中学生や高校生が自分たちで出店したり、イベントを企画したりすれば、彼らが楽しみながら地域に参加するきっかけになるはず。
 - そうした魅力的なイベントがあれば、地元を離れた若者たちも「後輩たちの活躍を見に帰ろう」という気持ちになるのではないか。
- 話者E (男性): 須山地区の人口が増えてきた歴史は、主に「分家」によって支えられてきた。
 - 若い世代が地元で家を建て、住み続けられるような土地利用や住宅建設の支援策こそ、地域の人口を維持し、活性化させる上で重要なのではないか。
- 話者F (男性): 須山で子育てをする魅力と、これからもっと良くしてほしい点について。
 - 須山小中学校は財団法人の支援のおかげで、お茶の道具一式が揃っているなど、教育設備が非常に充実している。これは他の地域にはない、本当に大きな魅力。
 - 一方で、塾や部活動の選択肢が少ないという課題は確かにある。これを補うための学習支援の機会がもっとあれば嬉しい。

- 保育園と幼稚園を一体化した「こども園」や、子育てについて気軽に相談できる場所があれば、さらに子育てしやすい環境になると思う。
-

発言を通じた重要な指摘や提案

- 子育て・教育環境の充実:
 - 天候に左右されずに子どもが遊べる屋内施設(児童館機能)と、高齢者も集える複合施設の設置が強く望まれている。
 - 須山小中学校の充実した設備や教育環境は大きな魅力であり、これを維持・発展させることが重要。
 - 塾や部活動の選択肢を補う学習支援や、保育・幼児教育の一元化(こども園)が求められている。
 - 若者の定住と地域の魅力向上:
 - 若者が将来戻ってくるためには、地域への愛着や「地域に育ててもらった」という感謝の気持ちを育む仕組みが必要。
 - 夏祭りなどのイベントに若者が主体的に関われる機会を創出し、参加したくなる魅力的な内容に刷新すべき。
 - 若者が地元で家を建てて定住しやすくなるような支援策も検討すべき。
 - 地域運営の課題:
 - 住民との意見交換会で出た意見や要望に対し、その後の検討状況や結果を住民にフィードバックする仕組みが欠如している。
-

議事録(テーブル2)

発言の要旨

- 話者L (女性): 働く親としての現実的な視点から、須山地区の保育・幼児教育における課題を提起。
 - 須山幼稚園は現在、園児数が2名と非常に少なく、子どもが集団行動を学ぶ機会としては不十分だと考える親が多い。そのため、他の地域の私立幼稚園を選ぶ家庭も出てきている。
 - 多くの働く親にとって、保育施設は自宅の近くよりも「職場の近く」にある方が利便性が高い。緊急時にすぐに駆けつけられるため、須山に「こども園」を新設したとしても、必ずしも利用者のニーズと合致するとは限らないのではないかと。
- 話者M (女性): 地域の生活における交通の不便さが深刻な課題であると強調。
 - 病院への通院、日常の買い物、子どもの学校や習い事の送り迎えなど、生活のあらゆる場面で自家用車が必須。
 - 特に、高齢になり車の運転ができなくなった時の移動手段をどうすればいいのか、本当に不安。これは地域の多くの住民が抱える共通の悩み。
- 話者N (女性): 一度須山を離れて都市部で生活した経験から、須山の魅力と課題を語った。
 - 魅力: 夜が静かで、治安が良い点は、子育てをする上で非常に大きな魅力だと改めて感じている。
 - 課題: 生活インフラの不足が深刻。薬局やスーパーがないため、体調が悪い時でも車で町まで下りなければならない。また、高校生が地域内でアルバイトできる場所がないことも、若者にとっては大きな問題。
 - 提案: 24時間営業のドラッグストアのような施設が一つでもあれば、生活の利便性は格段に向上するはず。
- 話者O (男性): 10年以上前から計画されている「おし公園」の整備が進んでいない現状について。
 - 計画が長期間にわたり停滞している間に、当初の構想が現在の住民のニーズや社会状況と合わなくなっている可能性がある。計画を前に進めるにしても、今一度その内容を見直すべきではないかと。
- 話者C (高校生男性): 若者の視点から、公園整備について具体的な提案。
 - ただ公園を造るだけでなく、「場所」と「内容」が重要。若者が集まりやすい中学校の近くなどに、カラオケなど若者が純粋に楽しめる活動ができる施設を併設すべき。
 - 現状では、若者が地域に魅力を感じ、将来戻ってきたいと思えるような「仕掛け」が不足している。
- 話者Q (男性): 地域のイベント、特に夏祭りを若者にとってより魅力的なものに変えるべき。
 - 現状の夏祭りは参加者が固定化し、盛り上がり欠けている。
 - 中学生や高校生が主体となって出店したり、企画運営に関わったりする機会を設けることで、イベントが活性化し、地元を離れた若者も「後輩たちの活躍を見に行こう」という動機で帰省するきっかけになるのではないかと。
- 話者R (女性): 須山の豊かな自然、特に小学校裏の川にあるユニークな溶岩の地形を、地域の「自慢」として観光資源に活用してはどうか。

- 高額な費用をかけて大型の公園や遊具を新設するよりも、既にある自然の魅力を活かすべき。三島市の源兵衛川のように、川辺を散策したり、水遊びができたりする場所として整備すれば、維持管理のコストを抑えつつ、国内外から観光客を呼び込める可能性がある。
 - 課題: 観光客が増えることで懸念されるゴミの不法投棄や自然破壊を防ぐため、しっかりとした管理体制を同時に構築することが不可欠。
 - 話者P (男性): 地域の課題解決に向けた、持続可能な仕組みの必要性を訴えた。
 - これまでも行政や議員を交えた話し合いは何度も行われてきたが、そこで出た意見がその後どうなったのか、住民に進捗が共有されないまま立ち消えになることが多い。
 - こうした一過性のイベントで終わらせず、専門の部会やチームを立ち上げ、継続的に議論し、その結果を住民にフィードバックする仕組みを作らなければ、本当の意味での地域活性化にはつながらない。
 - 司会者: 参加者からの多様な意見に感謝を述べ、今回のワークショップが須山の未来を考える「始まり」であると位置づけた。
 - 特に、高校生から高齢者まで、世代を超えて率直な意見が交わされたことの意義は大きい。
 - 出された意見を今後の議会活動や行政への働きかけに活かし、継続して住民と共に地域づくりを進めていきたい。
-

発言を通じた重要な指摘や提案

- 子育て・教育環境の充実:
 - 天候に左右されずに子どもが遊べる屋内施設(児童館機能)と、高齢者も集える複合施設の設置が強く望まれている。
 - 英語教育やスポーツ指導など、特色ある教育プログラムを導入することで、須山ならではの教育の魅力を高めるべき。
- 若者の定住と地域の魅力向上:
 - 若者が地域に定住・帰郷するためには、生活インフラ(薬局、スーパー、アルバイト先)の整備が不可欠。
 - 夏祭りなどの地域イベントに若者が主体的に関われる仕組みを作り、地域への愛着を育むことが重要。
 - 大規模な公園建設よりも、カラオケなど若者が純粋に楽しめる小規模な活動拠点の整備が求められている。
- 自然環境の活用と保全:
 - 小学校裏の川の溶岩地形など、須山独自の自然景観を観光資源として活用し、散策路などを整備すべき。
 - 観光客の増加に伴うゴミの不法投棄を防ぐため、地域住民と行政が連携した管理体制の構築が急務。
- 持続可能な地域運営:
 - 住民との意見交換会を一過性のものにせず、その後の進捗状況を住民にフィードバックする仕組みが必要。

- 専門の部会などを設置し、継続的に課題を議論し、実現可能な計画に落とし込んでいく体制づくりが求められる。
-

議事録(テーブル3)

発言の要旨

- 話者A (高校生): 若者の視点から、須山地区の人口減少対策と魅力向上について具体的な提案。
 - 自分自身、須山に7~8年住んでいるが、地域の魅力や課題について十分に知らないと感じている。まずは須山の良さをより多くの人に知ってもらう必要がある。
 - 人口減少と高齢化が進む中、具体的な対策として「朝市」のような小規模で定期的なイベントの開催を提案。大きなイベントを年に1回行うよりも、毎週日曜の朝に農作物を販売するなど、住民同士や来訪者との交流の機会を頻繁に設けることが魅力向上につながるはず。
 - 須山小中学校の特色ある教育(自然体験学習など)をもっとPRし、特認校制度を活かして外部から児童を呼び込むことで、子育て世代の移住促進につながるのではないかと。
- 話者B (女性): 地域交流イベント「咲夜(さくや)マルシェ」の活動報告と、そこから見える可能性。
 - 浅間神社の御祭神である木花咲耶姫(このはなさくやひめ)にちなんで名付けられたマルシェを、月1回開催している。
 - 当初は数名のスタッフで始めたが、今では多くの地域住民が協力し、野菜や手芸品、着物のリメイク品などを持ち寄って販売・交流する場に育っている。
 - この活動を通じて、地域住民同士の新たなつながりが生まれており、今後も継続していきたい。
- 話者C (男性): 裾野市の夏祭りや地域のイベントについての考え。
 - 裾野市全体の夏祭りは盛況だが、須山地区として独自のイベントが少なくなっているのは寂しい。
 - かつて行われていた須山夏祭りのような、地域住民が集まる機会はやはり重要。小さな規模でも良いので、子どもからお年寄りまでが楽しめる場を設けることが、地域の活気につながる。
 - 企業が進出し、働く場所が増えるかもしれないが、それだけでは住民の定住にはつながらない。生活の楽しさやコミュニティの魅力が必要。
- 話者D (男性): 地域の役員の負担が、若者の定住を妨げる一因になっているのではという懸念。
 - 消防団や区の役員など、地域活動における役割の負担は決して小さくない。若い世代が須山に戻ってきても、そうした負担を敬遠して他の地域に住んでしまうケースがあるのではないかと。
 - 人口が減少する中で、従来の役員の仕組みを維持するのは困難。役員数を減らしたり、活動内容を見直したりするなど、時代に合わせた組織改革が必要。
- 話者A (女性): 研修センターの利用について、子育て世代の視点から具体的な提案。
 - 現在、研修センターの利用には事前の団体申請が必要で、個人や少人数のグループでの利用が難しい。これが大きなハードル。
 - 研修センターをもっと「フリーなスペース」として開放してほしい。例えば、特定の曜日や時間帯を予約不要で利用できるようにすれば、雨の日に子どもを遊ばせたい親や、バランスポール教室のような趣味の活動をしたい住民が気軽に集まれる。

- かつて存在した「つくしんぼ」(未就園児のサークル)のような活動を復活させたい。地域の母親たちが持つ特技(お料理、歌、読み聞かせなど)を活かし、子どもたちや地域住民と交流できる場を作りたい。そのための活動拠点として研修センターを活用したい。
 - 話者B (女性): 長泉町の「エスポ広場」を参考に、子育て支援のあり方について。
 - エスポ広場のように、予約なしで気軽に立ち寄れる子育て支援施設が須山にもあれば、親子の孤立を防ぎ、住民同士の交流を促進できる。
 - 子どもが成長するにつれて、学童保育の充実も重要になる。そうした施設があれば、若い世代が須山に定住しやすくなるのではないか。
 - 話者C (男性): 裾野市で唯一となる須山小学校の「特認校制度」をもっとPRすべきだと強く主張。
 - 須山小学校は、地域の豊かな自然を活かした体験学習など、他にはない魅力的な教育を行っている。この点を市外にも積極的に発信し、子どものために移住を考える層にアピールすることが、人口増加の鍵になる。
 - 須山の自然や文化は、都会にはない貴重な財産であり、これを活かした教育は大きなセールスポイントになるはず。
 - 話者D (男性): 須山の交通アクセスの悪さが、生活の質を低下させている大きな要因。
 - 特に、病院へのアクセスに課題がある。診療所はあるものの、専門的な治療が必要な場合は市外の病院まで行かねばならず、時間も費用もかかる。
 - 公共交通機関が不便なため、高齢者が運転免許を返納した後の移動手段が確保されていない。地域住民が安心して暮らし続けるためには、交通手段の確保が急務。
 - 話者E (女性): 高齢者の視点から、健康寿命を延ばすための取り組みの重要性。
 - 元気な高齢者が多い須山において、健康を維持し、社会とのつながりを持ち続けるための活動が必要。
 - 現在行われている「いきいきサロン」のような取り組みをさらに充実させ、高齢者が気軽に集まり、交流できる場を増やすことが、地域の活力維持につながる。
-

発言を通じた重要な指摘や提案

- 地域資源の有効活用とアクセシビリティの向上:
 - 研修センターは、事前の団体予約制という高いハードルを下げ、個人や少人数でも気軽に利用できる「フリースペース」として開放すべき。これにより、子育てサークルや趣味の活動など、住民の自発的なコミュニティ活動が活性化する。
 - 須山小学校の「特認校制度」と、自然を活かしたユニークな教育カリキュラムは、地域最大の魅力の一つ。これを市外に積極的にPRし、子育て世代の移住を促進する戦略的な取り組みが必要である。
- 生活インフラの整備と住民の安心:
 - 交通の不便さは、高齢者だけでなく全世代にとっての深刻な課題。病院へのアクセスや日常の移動手段を確保するため、デマンド交通や地域住民による送迎サービスなど、新たな交通システムの導入を検討すべき。
 - 高齢者が健康で生き生きと暮らせるよう、「いきいきサロン」のような交流の場を拡充し、社会参加を促す取り組みが重要。
- 世代を超えたコミュニティの再構築:

- かつての婦人会や子ども会が果たしていた役割を、現代のライフスタイルに合った新しい形で再構築する必要がある。特定の役員に負担が集中するのではなく、誰もが気軽に参加できる緩やかなつながりの場が求められている。
 - 住民一人ひとりが持つ特技や知識を活かし、教え合う場(例: バランスボール教室、料理教室など)を設けることが、世代を超えた交流と地域の活性化につながる。
- 未来への視点:
 - 短期的な問題解決だけでなく、「10年後、20年後に須山がどういう地域でありたいか」という長期的なビジョンを住民全体で共有し、それに向かって具体的な計画を立てていくことが不可欠である。